

寄宿の生活三年間 (※1)第 20 回卒 佐藤 キクエ (※2)

昭和 16 年 4 月、中村高等女子職業学校と校名が改正された学校に入学、昭和の年代と共に生きて来た私達です。小学校に入学の時は教科書も新しく、サイタサイタサクラがサイタをお習いした初代の児童達だ。何かにつけ節目の縁のある年廻りの様である。今にもほころびそうな、桜並木の校門を入った時の緊張が、鮮やかに記憶に残り、当時の傍がありありと思い出される。

小さな赤い屋根の校舎。塵一つなく清められている校庭や教室。清らかな乙女にふさわしい学舎だった。通学にも電車、自転車、バス、徒歩とさまざまだったが、バス路線もなく自転車では遠過ぎ、自分の足だけが頼りの私の環境は、当然、下宿か寄宿生活以外、通学不可能だったので、幸いにも地元の先輩の方が、寄宿舎に入っておられましたので、私もお世話になる事になった。

寄宿舎はお部屋が 10 畳、襖境いで 6 畳の二間で、職員室の 2 階になっていた。一部屋に 6 人、多い時には 8 人もの少女達が、肩を寄せ合って暮らして居た。隣りは宿直室になっており、先生方が代わるがわるお泊りになって居た。後になって、若い新任の先生が常直なさる事になり、私達と一緒に生活することになった。理智的で素晴らしい、お姉様が出来た気分で、今の言葉のルンルンと云う気分だった。

1 週間の献立を作り、二人づつの食事当番が、皆の 1 日分の御飯の用意をするのだが、先生お二人も当番に入って頂いて居たので、其の時は私達には出来ない、美味しい料理が並べられるのである。皆んなその日を、本当に楽しく待っていた。

12 月 8 日大東亜戦争に突入。食糧事情も悪くなったので日曜日になると、それぞれ家に帰って、野菜やお米を運んで来た。遠く田村郡から来ていた方、又双葉郡の方々不便で苦勞された。寄宿代は正確に記憶しておりませんが、1 円 50 銭だったと思う。

10 畳の部屋に、8 人もひしめいて暮らして居るのですから、淑やかにしている心算でも、階下の職員室から、お叱りの言葉も度々飛んで参り、試験に入ると、それぞれ図書室や教室に分散するが、灯りの欲しい時刻には、皆お部屋に戻って来る。今度はビッシリ敷きつめた布団の中での勉強になる。お互い何時に起こしてと言って、一眠りするが、目が覚めて見ると、皆ぐうぐう枕を並べてのダウンだ。家から通学の方よりも、いっぱい時間がある筈なのに、余裕が怠慢を生んで、授業開始のベル直前に、教室に入った。

親元を離れた年齢は 14、5 歳、お互い励まし合いながら 3 年間を、激しい戦時下に暮らしたわけで、楽しい心豊かな寄宿舎生活だった。もう 50 年を経ているが、今でも姉妹の絆は固く、文通や電話の連絡が絶えない。時々、寄宿舎生活を語る集いの機会を持ち、思い出話に花を咲かせている。

校舎跡地に数本残っている桜が、私達の生活を知っていたのだと思うと、あの場所を通る時、何か胸に熱いものがこみ上げて来る。記念碑も建てて頂きましたので、今後は相馬に帰ってこられる友と、散歩するのを楽しみにしている。

(※1) 『相中相高百年史』 (1998 (平成 10) 年 7 月 6 日発行) 「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 駒形。八幡出身。昭和 18 (1943) 年卒。職業 (専攻)。

思い出のメロディー (※1)

第21回卒 高田 トミ (※2)

44年振りに顔を合わせた同級生。多少のしわの刻みは深くなっておりましたが、懐かしい乙女時代に甦るのに5分とかかりませんでした。「お久しぶり…お達者で…。」「お陰様で…。」笑顔の挨拶が終わると、思い出話に花が咲き、次のような会話が出て参りました。

「月曜日の朝だったかしら、放送で流れた感恩の歌、報徳の歌、ほら、重々しいメロディーが思い出されますね。」

戦争という、暗い時代の不安な時期にありながら、なぜかこの歌を聞くと、心に安らぎを得、ほっと安心感を味わわせてもらえたのです。

体育の時間には、竹槍教練が組み込まれ、防空頭巾にモンペ姿の女学生。「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、リボン一つ髪に結べない、質実剛健な女の道を学ばして頂きました。

銃後を守る女性戦士ともてはやされ、真黒に日焼けしながら勤労奉仕の田植え、稲刈りに汗した日々。働いた後の小昼のさつま芋が、どんなにおいしかったことか、走馬灯のように浮かんで参ります。

しかし、お陰様で、敗戦後の幾重の苦難にも動ぜず、耐え忍んで生きることができました。時の流れに右往左往しながら、妻となり親となった時、脳裡に刻まれたあの懐かしいメロディーは、感恩の歌であり、天地自然の恩、父母の恩、友との出会い・すべてに感謝する歌であった。

逆境に立たされた時もなぜかこの歌が、温い心を蘇らせ安らぎを与えてくれて、支えてくれたものである。………… 後 略 ……………

(※1) 『相中相高百年史』 (1998 (平成10) 年7月6日発行)

「第三部 第二章 馬城会の歴史 及び 第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 高平出身。昭和19 (1944) 年卒。教員養成所。

友情よみがえる名簿 ^(※1)

第21回卒 桜岡 ミツ子 ^(※2)

大正10年に創立の、中村町立実践女学校は、報徳の訓えを教育の核として、学制改革の昭和21年までに2千6百名の卒業生を送り出したといわれます。このわが母校は、この間何度も校名が変更され、相馬高校に家庭科別科として編入されました。このことを最後として、母校の姿はいつの間にか消え、市の発展と共に現在に至っております。

県立高校となり、おかげで自動的に栄えある馬城会員となれたのは、喜ばしいことです。しかし、昭和55年度会員名簿作成にあたり、いつのまにか理事に任命されていた私が、責任上、昭和19年(21回)卒業生の名簿を調べました。住所・電話番号などに、大分時間をかけました。私の手もとの受話器に流れる、40年ぶりのなつかしい声の喜びは、一入なものがありました。

名簿の空白部分が、一つずつ埋まる喜びも大きいものでした。中村高等女学校として出ている立派な名簿ができ上がり、販売協力のため市内の会員を訪問した時、昔話に花を咲かせる楽しさも格別で、しかも絶えていた友情がよみがえる思いもいたしました。

戦中杉田先生の指揮で訓練させられた竹槍運動・ロープ伝いに屋根に登ってする消火訓練等今にしてみればおろかな訓練かも知れないが、でも、モンペにセーラー服の戦時教育だったのである。元来くせ毛だった私は、「おいおいお前パーマをかけているのか。」と頭を叩かれ、「違います。」と、顔を染めたことがあり、今は亡き松田 ^(※3) 先生の厳しい教育の一面を忘れることができない。

…………… 後 略 ……………

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉

「第三部 第二章 馬城会の歴史 及び 第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 森田。中村出身。昭和19(1944)年卒。

(※3) 松田 一。中村出身。相中第19回、大正10(1921)年卒。法大。相中教諭：昭和7(1932)年～昭和16年、国語。

中村高等女学校教諭・校長：昭和16年～昭和23年。相高教諭：昭和25(1950)～昭和33年、等。